

## ペルー・アンデス学術調査総括報告

創立80年を記念して、関西大学ペルー・アンデス学術調査隊が結成されたのは1965年4月24日であった。この学術調査隊は大学としては最初の海外派遣の調査隊であり、本部長に末永雅雄教授、副本部長に加藤一朗教授、派遣隊長に私、副隊長に神月彰助教授が任命された。隊員としては中野力副手、探検部OBの近藤嘉彦、米川利美の諸君、山岳部OBの日比進一、池内嘉宏、長谷川裕一の諸君と考古学教室から久野邦雄君が参加した。学術調査隊の事務局は企画調査課におかれ、田中一郎課長、山下正隆主任が派遣事務を担当、報道は大阪読売新聞社、読売テレビ放送が協力後援してくれた。

4月29日12時30分 本隊の池内、米川、久野、長谷川、中野の5隊員が新幹線で出発したが、それまで隊員たちは食糧・装備のこん包に徹夜の連続であり、私、日比、近藤隊員は、外務省・防衛庁航空幕僚監部・川崎汽船・中南米運賃同盟・ペルー・ファル観光団などに事務連絡のため再三上京し、多忙な毎日であった。

5月5日本隊の5名は、川崎汽船「健島丸」で横浜の山下十番突堤より出航し、1カ月の船旅のち6月4日 リマ外港のカリヤオに上陸した。私、近藤、日比隊員の3名からなる先発隊は5月27日13時40分 豪雨に洗われた大阪国際空港を多数の見送りをうけて出発し、責任の重大さをひしひしと感じた。

翌28日18時50分 CPAL 航空で東京国際空港をあとに、約3カ月のペルーでの学術調査に向った。カナダのバンクーバ、メキシコのメキシコ市を経て、本隊より早く5月31日6時20分 朝靄につつまれたペルーの首都リマ・カリヤオ国際空港に到着した。ペルーにおける隊の身元引受人である伊藤正則氏の出迎えを受け、日本の探検隊、調査隊の利用するオリエンタルホテルに落ちついたが、早速、6月1日 ペルー文部省体育局長 CARRLOS ROJAS Y ROJAS 氏、山岳課長 CESAR MORALES ARNAO氏を訪問、アンデス登山についての指示を受けた。ついで、日本大使館の山津大使、堀領事に挨拶をした。6月2日にはペルーの代表新聞社、LA PRENSA, EL COMERCIO, ULTIMA HORAにペルー訪問の挨拶をし、学術調査の目的を説明、協力を依頼した。当日午前中に私は、伊藤氏の案内で HOSPITAL CENTRAL EMPLEADO (サラリーマン病院) に日系二世の足立、古賀博士を訪問し、院内を案内してもらった。翌6月3日 在留邦人唯一の新聞であるペルー新報に行き、紙上で在留の日本人々に挨拶をした。

リマ滞在中にお世話になった在留邦人の方々には数えきれぬ程であるが、終始調査隊のめんどうをみていただいたのは伊藤正則氏、ファル観光の玉城信次郎氏、金城寛一氏であり、カリヤオより陸揚げした荷物の複雑な税関手続については日系一世の八木正徳氏に世話になった。荷物の中で、リマに残留するものについてはペルー新報社長の長谷川治朗氏に保管を依頼し、大変迷惑をかけた。ペルーにおける調査隊の活動は日系邦人の力を借りなければできぬことが多く、ご協力いただいたことを隊員一同厚く感謝している。

荷物の陸揚げに予想外の日数がかかり、やっと6月12日朝 私、近藤、米川、久野隊員はコレクティボ(バス)で、他の隊員は荷物と共にトラックでリマを出発した。パン・アメリカン道路(パナメリカーナ)を一路バアランガまで130KM程進んで分岐、チキアンに向い、16時頃ワラスとの分岐点のコノコチャ(4,030M)に到着、隊員のほとんどが高山病の症状を示した。バスの終点、チキアンに到着したのはリマ出発以来12時間目の18時過ぎであった。翌13日は日曜日で教会の広場に集積した荷物の周囲は野次馬の人垣きがで、整理に隊員が苦勞をした。日本からの調査隊は最初であったので大変な人気であった。

6月14日快晴、35頭のブーロ(ロバ)に荷物をつんで、ヒリジャンカ北峰登頂のキャラバンは出発した。目的地ポコバには18時頃着く予定のところ、地図不完全のため予定より遅れること3時間やっと到着、寒気に震えながら高度3,000Mの部落の広場で一泊した。15日は4,600Mの峠の下で一泊、16日15時 ヒリジャンカを望むニナコチャのベースキャンプ予定地に到着した。翌17日から隊員は登頂ルート偵察のためにベースキャンプを後にした。

6月18日10時30分 考古学班の久野隊員は6月24日クスコで行なわれるインティ・ライミィ(太陽の祭)を見るために下山した。私も同行する予定であったが高山病が完全に治らず、残念ながらベースキャンプにとどまることにした。6月22日 全隊員休息をとり、明日からのヒリジャンカ北峰アタックの準備をした。ベースキャンプの気温は、正午に25℃、夕方には14℃に下る。朝は-5℃で温度差は約30℃もあった。

6月23日 隊員全員アタックキャンプに向って出発、ベースキャンプの留守番をする。午後には天候激変し、運悪く雨がテントをたたきはじめた。夕方にはぼたん雪になった。6月24日、25日快晴でアタックがつづけられた。

26日、27日は雲が多く、冷たい風が吹きつづけた。6月28日 第3次のアタックを長谷川、中野隊員が開始、1時間ごとのトランシーバーでの交信で、2隊員の登はん状況が知らされてきた。登頂成功を望みつつ、危険がなければよいがと、テントを出たり入ったり、黒点のような2隊員を見ながら心配する。16時ビヴァークすることに決まった。今日のベースキャンプは比較的あたたかいが岩場でのビヴァークは風も強く、寒いだろうと寝袋に入っても寝つかれなかった。6月29日6時30分の交信では、稜線まで間もなく達するとのことであったが、雪の状況悪く登はん困難と10時に知らせてきた。危険の伴う無理な登はんは中止した方がよいと連絡していたところ、12時には登頂を断念し引き返すとの交信を受けた。ヒリジャンカ北峰の登頂は成功しなかったが、6月30日隊員全員ベースキャンプに元気な顔がそろい、テントの前に装備を運搬した箱をならべての急造の食卓で、サンサンと照る太陽のもとで昼食をとった。

私、近藤隊員はヒリジャンカ登はんの計画が終ると下山し、リマに帰ることにしていた。その予定は7月1日出発の予定であったが、ポコバでたのんでいた馬が一向に迎えにこない、余り待つことができないので、近くの部落に近藤、中野隊員と案内人のソラノの3人が、馬の交渉に行く。

7月4日9時20分 私、近藤、長谷川隊員とソラノは乗馬でベースキャンプに残る隊員に別れて出発した。峠を越す頃にはボタン雪が降り、パリカパンパで中食をとる時には雨にぬれ、18時頃やっとポコバに着き一泊した。翌7月5日は昨日とうって変って空には一点の雲のない晴天、乗馬による脚、腰の痛さを除けば快適なキャラバンであった。チキアンで久々に、エアーマットより滑り落ちる心配もなく、ベットでぐっすり寝た。

7月6日9時すぎ長谷川隊員は、ソラノと一緒に昨日の道をブーロに荷物をつんで、ベースキャンプに帰る。私、近藤隊員はバランカを経由18時頃3週間ぶりでリマに帰った。

山岳班は日比隊員を班長として、池内、米川、長谷川、中野隊員の5名により、私の下山後行動を開始した。7月5、6日にヒリジャンカ・チコに登はん、7月9、10日にシウラ・グランデ登頂のため移動、高度4,200Mのカワコチャにベースキャンプを設けた。7月11日から8月3日までシウラ・グランデ登頂に努力したが、移動後は天候に恵まれず滞在中の半分は雨または雪にあい、全く悪い状況であった。この悪天候の中で米川隊員とソラノはサンタ・ローザ東峰の登頂に成功、他の隊員もシウラ・グランデの6,150M地点まで到達した。

考古学班の久野隊員は、東京大学第3次学術調査隊員であり、調査後残留してサン・マルコス大学文学部で研究している宮崎泰氏と共に遺跡の調査、遺物の採集に従事し、また トルヒヨ地区の遺跡調査に努力した。

医動物学班としての私、近藤隊員は7月13日 伊藤氏の案内で厚生省に大臣の医学担当顧問 ORALLE 博士を訪問、私の調査目的を話し、見学の計画を相談した。翌14日 ORALLE 博士の紹介で、INSTITUTO DE SALUD OCUPACIONAL (産業医学研究所)を見学、午後は SNEM [SERVICIO NACIONAL DE ERRADICACION DE LA MALARIA] (マラリア防遏研究所)を見学した。

7月16日 私と近藤隊員は FAUCEIT 航空で、アマゾン河の上流の都市イキトスに向って出発した。アンデス山脈をこえ、樹海の上を飛び、約3時間で到着した。イキトスは南緯3度45分、熱帯であるが、毎日のスコールで気温は30℃以上にならない。私たちの宿舎ホテル・リマの経営は日系一世の儀部喜昌氏の息子がしていたが、私たちの滞在中儀部氏がリマからこられ、イキトスの案内役を買ってられ、非常に世話になった。7月19日 イキトスの郊外にあるイキトコチャに日系一世の三宅氏が指導しているバイチの養魚場をみに行った。バイチは飼育2年余で1m以上にもなる淡水魚で、その味は淡泊で美味であった。7月20日 SNEM の第5地区支所長、ISMAEL ARRUNA TEGUI VELÁSGUEZ 博士の案内で、研究所のモーターボートに乗り、アマゾン河の下流、リオ・マニティに行った。イキトスから約1時間30分 アマゾンの流れに乗って下った。

リオ・マニティー帯は以前は裸体で野蛮な生活をしていたというが、現在はその片鱗も見られず小学校ではイキトスの子供と同じように熱心に子供達は勉学をしていた。

7月21日14時30分 昨日同様、所長の案内で、アマゾン河の支流、リオ・イタヤをさかのぼり、約1時間でソリダに着いた。製糖工場が部落にあるが、現在は休業中で、特に見学するものもなく、夕闇にとざされているイキトスに18時すぎに帰った。7月22日 SNEM の日系二世松野博士にアマゾン流域のマラリアについて説明をきいた。午後は松野博士と共に松藤氏の農場に栽培している熱帯植物の見学に行き、ピメンタ(こしょう)がブラジル同様イキトスでも枯死しないで成育することを知った。7月24日 イキトスで世話になった日系一世、二世の人々の活躍を祈りつつ、11時発の飛行機でリマに帰った。

迎いにきてくれた久野隊員に副隊長の神月助教授が、チリからリマに来ていることをきく。神月助教授は多忙で、翌25日11時 ボリビアのラパスに向って出発した。7月28日から3日間、ペルー国独立記念日のため調査活動ができず休息日とした。

7月30日14時30分 チリ、サンチャゴに向って出発、飛行機の故障のため出発が約1時間遅れたので、南米一の高山アコンカグア(7,130M)は夕闇につつまれて見る事ができず残念であった。約4時間でサンチャゴ国際空港に到着、ホテル・キリジョンに泊った。

サンチャゴは人口約200万、市の背後に4,000M以上のアンデス山脈がそびえている。気温12℃日本の晩秋の気候であり、桃の花が美しく咲いていた。チリはインフレがつづき、食費もペルーにおける2~3倍もかかり、長期滞在は困難であった。8月5日16時30分 LAN-CHILE 航空でサンチャゴを後にし、ペルーとチリの国境の町アリカに一泊した。気温25℃、非常に暑く感ずる。町の繁華街で日系二世の高木氏に逢う、ボリビアの移民とか、失敗してこの町に住んでいるという。非常に貧しそうで異国でみる同胞に同情した。8月6日15時20分 LAB 航空でラパスに向う。

約1時間で4,105Mのラパス空港に着いた。空気稀薄で、高山病に苦しむ。3,632Mのラパス市に下って、少しらしくなった。ホテル・グランドに宿泊することにした。ラパスはボリビアの首府で、人口約40万、気温10℃で寒い。ラパスでは日系二世の大泉氏に世話になった。8月8日6時40分 大泉氏の案内でツワナクの遺跡を見学に行き、午後はチチカカ湖畔のハタハタに淡水産の貝を採集に行く、海拔3,500Mの湖の水の色は濃紺で美しかった。8月9日14時 海拔5,300Mのチャカルタヤにあるボリビア国立宇宙物理研究所を訪問した。ここには2名の日本人の研究者がきているということであったが、休暇で逢うことはできなかった。

8月10日16時 BRANIFF 航空でボリビアを出発、リマ時間17時40分リマに帰る。8月12日21時すぎ米川隊員から山岳班リマに到着の通知があり、早速、荷物の集積をしている長谷川氏の工場に急いだ。

山岳班5名の元気な顔を見て、自分の任務のほとんどは終ったと緊張がゆるむ。8月14日 川崎汽船で帰国する隊員の船便が約1カ月遅れることが分かったので、私は帰国準備に追われる。8月17日 近藤、久野隊員を除いた5名に私、ファル観光の小森氏の7名は8時発の中央鉄道で、オロヤに行った。オロヤは銅山の町で、アメリカ資本の CERRODE PASCO 会社が採掘をしている。この会社の付属病院である CHULE 病院に LOPEZ 博士を訪問し、病院を見学した。8月22日15時50分 私は VARIG 航空で単身リマ国際空港をたち、帰国の途についた。8月26日16時40分 東京国際空港に日本航空で安着、3カ月ぶりに日本の土を踏んだ。翌27日14時50分 大阪に帰った。

私の帰国後、9月11日 空路近藤隊員が帰国、ついで10月14日 日比隊員も帰ってきた。予定の遅れていた本隊は川崎汽船「聖川丸」で約50日の船旅の後、11月11日 横浜に到着、現地からメキシコに留まった米川隊員を除いて、全員無事帰国を終った。

このようにして、関西大学はじめての海外での学術調査は無事に終了したが、これはひとえにペルーの在留邦人の方々のご協力と大学関係者の皆様のご援助によるもので深く感謝をします。また私たちの調査中留守部隊として、ご活躍いただいた本部隊の方々、事務局の皆さんに厚くお礼を申します。

隊長 杉 原 弘 人